32　知的障害施設で特異な経過を示した虫垂炎の３例

自立支援局秩父学園　医務課　　西野力男，　看護師一同

演者の秩父学園に赴任後２０年弱の間に、虫垂炎を３例経験した。とくに３歳未満や高齢者では発見が遅れやすいと言われており、その原因として本人からの十分な訴えが出来ないことがあげられてる。そして知的障害においても年少児と同様な機序が推測されている。しかし、この３例はコミュニケーション障害があるものの、防御反応の異常もしくは小奇形や原因発見の困難性に大きく由来し、いずれも特異な経過を呈したので報告する。

【症例１】４０歳で発症、異食で医務課寮に所属していたが、改築工事のため仮舎に移動した翌日に39.5℃の発熱を呈した。しかし、表情や食欲など日常生活において今までと特に変わった様子はみられなかった。腹部所見として、臍部から左側腹部にかけて軽度の筋緊張を認めたが無表情で、筋緊張は異食によるものと考えた。また、咽頭発赤もあり、Keflar を開始した。しかし、翌日早朝に腹部緊満と痛がる様子となりＫ病院に緊急入院となり、5:30am 開腹し、虫垂は左横行結腸の後方に迷入し穿孔し、汎発性腹膜炎を呈していた。以後、4 ヶ月後に術後イレウスが 1 回生じたものの、順調に経過した。

【症例 2】２８歳、直ぐしゃがみ込み顔色蒼白となるとの職員からの報告があった。
McBurney 部にデファンスを認め、同時に左右酩酊様のフラツキにより立位保持不可であった。
本人は多少の会話が可能であったが、腹痛の訴えは認めなかった。腹部所見から虫垂炎を疑い B 病院を受診したがわからないと言われて帰園した。その後、緑色胆汁の嘔吐の反復があり、再度受診し、脱水と軽度のショック状態があるとのことで入院となり、翌日昼に手術となった。手術の結果は、明かな腹膜炎で膿が付着し、炎症は虫垂周辺の右側に限局していた。虫垂は腹膜炎が生じた割には軽度なので、卵巣等も精査したが特に原因は虫垂以外は見あたらなかったとのことであった。しかし、濃緑色の胆汁の排泄が続いたため入院 22 日目に退院となった。退院後も食べ過ぎて濃緑色もしくは茶褐色の嘔吐を反復し、B 病院から学園での点滴依頼があり、顔面蒼白でもありＫ病院へ入院依頼した。以後 2 回Ｋ病院に入院したが、2 回目のＫ病院入院翌日に急変し死亡した。初回の入院後 2 ヶ月半の経過後であった。

【症例 3】２９歳で発症。元気不良で発症し、翌日は食欲減退し、発症 3 日目には「痛い」という訴えと不機嫌そうな表情を呈していたが、腹部や腕などを押さえても痛みの訴えがあり、表情や訴えからの局所的圧痛の差異は認めなかった。軽度の脱水を考えて補液したのちに両側の下腹部に軽度の筋緊張を触知し、当時まだ普及されていない腹部エコーも含め、K 病院外科に依頼したところ、虫垂炎の疑い濃厚だが、まだ所見が無いので入院して所見が出れば手術をしたいとの返事であった。そして 4 日目に虫垂炎の所見が出現したが、母親の希望で抗生剤の点滴を行い治癒した。しかし、所見出現から 10 日間以上 McBurney の明かな圧痛が続いていた。

これらの症例から、単に訴えることができないための診断の遅れではなく、虫垂炎の所見が乏しいことに由来するものであり、腹痛が増強時は手術可能な病院に緊急受診する体制を用意しておく必要があると考える。